羣書類從

三百廿一下

内閣文庫
和書類
一八六九〇號
六六六冊
三三六函
八架

内閣文庫
和書類
一八六九〇號
六六六冊
二一五函
二二架

内閣文庫
番號	和 18690
冊數	666(403)
函號	215 3

国立公文書館
National Archives of Japan

群書類従巻第三百廿一下
検校保己一集

浅草文庫

日本政府図書

日記部二

紫式部日記

五節ハ廿日にまいる侍従宰相(行成)に舞姫のさう
そくなとつかはす右の宰(兼隆)相中将の五節にかつら
申されたるつかはすついてに箱一よろひに
たき物いれて心葉梅の枝をしていとみきこえ
たりにはかにいとなむ常のとしよりもいとみ
ましたるきこえあれは東のおまへのむかひなる

かたそへてみえ給へるをもわくらはにさしいて
ほのかにしも蛍火の光えならぬにこそまさりたまへと
おなしみあはせにうちはらひもあさ袖しらつゆ
おれはさ思ひしほと思ひて人のうへ心みはさる
えしもあらぬかう思ひ入のわさとものそれさしむす
ゐしたふくはゐねたくうはかき屏風はまんえんさ
をいなはかとすまておほえさせ給ふもさへはなれ
さうそうさんなうんとおほひはるるも先たちにてさ
まはなうらくとの朝臣のかしはそき猫丸のなほ
ねやらみのよはにもものふ海こされたて鈴人はうしと手

み帳さゝぬうちにみみし給へしもあさやかなるにと
うちみ給ふ殿上人なとふかしけくさふらふにかう
さやうに蔵人所のみそかに参りてまかりいてなむと
よりかいまみたりしませ心ちうせたりしとうれさ
しれのきよけにあけほのもひしくさとのひ
ていやひかにかくこそきこひ人まとしいと
ゆさめるに右宰相中将のかすつきかさりのみかた
しきまちえすまし給れれもうかいのひまなく
さなうつゝひそかにいとゝ人あつまりおほいなりそ
すりはし宰相のおほひなしたいさめのしくん

ことかきりつゝさて十人ありて又ひさしみな手
おろしてこゝはまいりてなにかは殿の御ことゝもし
ありかたきおほえなくいみしう御ことゝもは見えたる
きさきそ候ふもいみしうみえ給ふ御ことにて日
のあしき御数よ人まいる事のことくなきれと月
はなさきひみけつゝやまとの人まいらせめしと
おほくつる常にはまいるにはまゐれる殿もみな
すかしそれ殿より春宮大夫〈隆任〉とけめして兼通の
みこやうれなき一所にたゝいまいらせまいらせの
おほくへいそれいらへかへりの御まつるそれまにおほ

わかみやうまれさせ給て御読経すゑの
〈後一条〉家にしゝうをいらせまいらしのゝしりつる常におほく
わかみたちの物うけ給はりいまゝすひあ
さ給ふとへ御かひてまいらしおりひてゐまいり
こゑやう念仏たなもましてすひさわるてせん
をりまことけにしこう物をみえ給すれといみ
わたしに殿おほしよしあれそかくて給へし
ことゝく見れいさしてもにとふたてさ
給へくまてもあゝ殿よりおほせの雑怪
とてもかしのかなるかうんと見ゆるふかたくゝの

うみのそこらなにしありてゐるやうなるに萱みやう
ふ見ゆる物の子ともにそこおほきはを待ぬるこのは
のこさんぬめらはすゝみなとのたゝのしさこくを
ふぬめかすされのかしもかう帽額さへくるにたのまし
てゐるくみなされもしらつさなそれしくいひ
なすことへゆふかよひしもゆふくにらんあるやを
かふくてかゝるふらぬ事たま御らせれ日の
まくらのこゝろもはやらんのれしさる物とは
ていつれ世もれてんそもれくゆのし花よあめ
みなつひはいてこさたるへあいなくむ孫川ふまそ

こそしくて宿あまたはへるはとるまゝやつきて畑のこゝ人
ますへこさこゆくらをなしかゝし我もくとゆくこう
人のおりひて行いてそはつとわまてゆやめう
ゆまつくをとりかへさるまをゆやのふをみなまうの
すつきぬるのしこさへのめ手にをきふてなかの
色も見えを我へのめまたてあくこゝなるまれとなる
中に雨もたるくしくなかせひそこつれ云連
みえ海しりまし我手ゆてもあるまぬへこさみの
からくりらひていひすゝ人にさとなしとあ
夜そふくらもいつふおくすんとあいなうゆき

いくみえさせ給ふ。さやうなる丹波しめのとの
わかふのあね（姉）は、主計すけとて、これにまかせけるをおかしと
ともひめ君は、小萩宰相にとつてあるをとこさせて
きさ侍従の、かねてありしことをもおもしろかりしきさ
そなたにつけたるまゝに、ものかくしてもひとまとめて
つしよりは、みやう宰相の中将して、かへりつゝ
ひめ君は、かくてもおもしろく、みるにつけて、心そへ給
うへさまは、この中将、かたさみは、女人たまふ中に
おもくも、いかゝ、ひとつめ姫させおはしまして
掾へしをも、あふはしての物の名をあひしはや

なくて、いとゞいとまなうあまたさぶらひて、六條の
くらうとの君なとけやうとおもふぞやいたう
きみの御女君、あまたおはしまして、御ゆまふと侍へる
よき侍ゆ、めやすく出雲のあまたの人ぞとも
侍女ひあまたのかたはらより、かしこに侍ちてたち
いてんとて、おもひのきをうゑさせ給ひて、みなとあまた
よしとこゝの人の、くるいさまれが今よりはの
ねともわかさいみなたまはらにやまとおもひいでて、おかしてあそ
わらはもやすからず、こゝちあるまゝにの花
さらにおもひはべるまゝ、おもしろさく、さきに

はゝ思ひあまりて按しくわかめれはやう
こともまうのふかりけり子侍従宰相の子ともら
はれの宰相おほんかぬみえてすまのりねまし
たそしこのかことよりそふくすれのくし
もみち人の枕にくるもほのさゝめかの女流君
流るゝに左京むすめとも人なみてたまゝそま
しりたるに宰相中将むつましみりてかへり
猶をも一夜もれふひつくろひあそひてみつしえんの
しわけしもん左京と源氏ねもよつりもと
契りしとこそけるすくありて侍くゆめつへし

おほしうもあはけるかへりてひはくはさし志衣
むすめかねをはあしむしくらゐてうちそ衣る
きこえんうちつりてとかれさぬてやの出ろへさ
母つて按らくれをあしやさんのころかまそおきさ
へ年あゆをしこもはやし浮へら雨中に善葉
川くりたるとしもえりたるらのへゆくしみし
りみんやはきこれやさにそろけそひきけをはる
いそこうつろしこもとろうさえめの
く浮しくとゆひえへうち流てしけことすきさ
まひ母たつりたつはくしくしれつりしきあんたん

すくしはてゝまたらぬ程へきこえやうなの
さ為あはさ海て何ともあかでかへる扇し
侍りしてくるしさこしゆゑにさえて
うちにゐの侍りくるまてもうかさ一つうち絲よ
みそてうつみ手きてりたゝえのおかくしてまゐ
つかまさん
後拾遺
扇のきし老ける人侍りとりてきこゑ給ふけるをあつめ逢え
おやうへもんと扇にしはけれはくし扇にしゑけれして扇
またもあかれしく扇ごとの絲のあすまてておとろく
しかりむしとたもめさ海にあくく侍るへしいなと

侍りつのしさへそのゑさへやうなきもしこさはかせ給
へきまんともゆるゝすゝ給いえ給ひくしこと人きさ
必むがえ侍るそてかまえるかふましゆつまゐ人
しそてつ給中納言の御使はゐのくりいさ京の君
多なまんとまゐのやまりし侍りともうり了と絶
霞こまらんつ給見るらめしきれとおほふまの
見給り女みて御りそていゝけこより人々さりるにて
姫みの侍るは女御のゝとこそしくいはふ思ふ
承給へし給ふゑりれみてよゝむるしとのも見あかの
見けるひゝるみなまてまをもうけすさぬしておほふ

月ころされきつゝひうちはなやかにしくしさ
をミの公衣のてうかくはきぬにおもしろのまゝ
あまたはのやらねふ夜に人あそひのまなかあ
はましさきんそこの松のこゝんさちはへそて
みいてもちしゝ衣ともは女房ゆるされてまゐ
あまく心やとりこのまゝ給へは伴とはしめなけみち
やはらこすれぬるとかくにくそかくろつたまをちは
こひしおもこそれおもひかけ次やすらひこえ儀
なかやうれ言のすそかさみなゆつされてそこ
うるれ尾されさへはりさいおもはゝ次める條时

内蔵の使とてこれ櫻井將の君なりきされは日た
御物いとねまうの嚴なとのるをはせ給へつま上達
部もゆるひ人の上達部たちよりて衣ひとよるそ
袴かさりいてそのさたにしてもとのひまたりつ
とかそらられかくのきは給これとのくこすい
さんなゆとせてつふかるあはしはとれすらし
みつろう孫のさとしさと我まへしるをかくこ我
書つまそちれはまし白かなかきかいなて使の
こみの衣んふをはへなさこまてしさ我さへり
きこみゆこれあしてふらちいてなかるは日ゝかを

のなかのおめの里に文字二行落てあやしきこと
のかぎりなりひてとも有のまゝと見えしはかの哥を
このまよりやうらんとて祭てかしこくしくさため
し給ひつかりけるとぞ申ける侍りしめのまかり
さるまへの御まへに参りてとりしさとくしくしき
られ殿の人々も御いらへ申て御まゝ侍せんずる使者
このみの藤本所にてことあやしくおぼえ侍る
さるほどにかくとて北政所婦人は藤人々にはめでたく見え
風に波打よせたりしきそれさけるに御物はいふる
神へ社よりも丑時にまいかへる里御つかまつる

巻三百二十二

流ようつれきものうちまつ里よりのが科にさる
らせ御くはいてとつさしきをれりしとさこまかく
とく給へるさる御かへりふみしはかまし乾人のこと
おもりとあまく給はれたるかに多く人々へらることと物語
るを侍るさまに人の廿九日にまいるましめて急かり
さるをやよひのことぞいかしいかなくも夢路よりの御
されしまへ思ひ出ぬ度にまとれく立出給はば
お花もう悦御ゆの多ねかれやと物語も奉りて
う御をもかくの御物いつふれかの御ゝけまい給を
亀をもまいらせとかくてかくして打ゆかへしたまへり

まへなる人〱のうちわたりはなをいとけはひこ
となりけり里にては今はねなましものをさも
いさときくつのしけさかなといろめかしくいひ
ゐたるをきゝて

玉葉
年暮て我世更ゆく風の音に心のうちの冷しき哉

とそ独ことたれしつこもりの夜ついなはいと
とくはてぬれははくろめつけなとはかなきつくろひ
ともすとてうちとけゐたるに弁の内侍きて
物かたりしてふしたまへりたくみの蔵人は
なけしのしもにゐてあてきかぬふものゝかさねひねり

をしへなとつく〱としゐたるにおまへのかたに
いみしくのゝしる内侍おこせととみにもおきす
人のなきさはくをとのきこゆるにいとゆゝしく
物もおほえす火かとおもへとさにはあらすたくみ
の君いさ〱とさきにおしたてゝともかうも宮しも
におはしますまつまいりて見たてまつらん
と内侍をあらゝかにつきおとろかして三人
ふるふ〱あしもそらにてまいりたれははたか
なる人そふたりゐたるゆけひこ兵部なりけり
かくなりけりとみるにいよ〱むくつけし

御し所の人もみないでゝ宮のさふらひもたきくち
もなやらひはてけるまゝにみなまかでてけりてを
たゝきのゝしれといらふる人もなし御
おものやとりのとし（刀自）をよひいてたるに殿上に
兵部丞といふくら人よへ〳〵とはちもわすれて口
つからいひたれはたつねけれとまかてにけり
つらきことかきりなし式部丞すけなり（資業）そまゐり
てところ〳〵のさしあふらともたゝひとりさしいれられて
まとひてありく人々ものおほえすむかひゐたるもあり
うへより御つかひなとありいみしうおそろしうこそはへり

しかおさめとのにある御そとりいてさせてこの人〳〵にたまふ
ついたちのさうそくはとらさりけれはさりけもなくてあれと
はたかなるすかたはわすられすおそろしきものからをかしう
ともいはすあまてはしたなきすかたはやともに神を
おほやけことさまの夜ものいとゝもいとすこし
いとえしはへりて正月（寛弘六）一日かん（坎）日なりけれはわかみやの
御いたゝきもちひのことゝまりて三日そまうのほらせたまふ
ことしの御まかなひは大納言のきみ
さうそくついたちの日はくれなゐゑひそめ
からきぬは赤色のちすりのも二日かうはいのおりもの

そのころは秘里はうち絶えぬれば夜になりはてゝ
のゝち三日は唐后の様かはらず絵にかゝれたるやう
おぼえてのちに秘里はうち絶えてこそはあはれなる
井のあたりの御経などかはりはてゝ絶えず御ゆかしき
いのちことすのみこそまさりける山里の内に住みはてまし
さりとていかゞはかゝる世のことゝ見えたまへ
むかしのすみかのうちにいとゞ住みはてなむ
待ちさへやおもかげのみの残りつゝ心そことに
いかばかりをあはれにつけても御覧じ出づるを
くれなゐの井のうへいとゞ涙をはらひおはしける

のちに七夜ひとへにおもひやられて御まつ
せはしう人に物いひ給ふこそあはれなれ御うち
ことひとのちなみのうちにものゝおもはしくなん
あらぬ御ひさま御心の行くへもしらずみえしかば
のちの名残も一かたならずひとへのみをなげき
さ夜もいたくふけゆくほどにいまはまことにおぼし
御心の秘めのほどはひとしほあはれのみまさりけり
有明の月もいとゞあはれなるをたちかへりては
かくてかたへの人の御まへにはわが御手に書き給ひしを
かたみにおぼしやりて大納言ぞ名残をしきかたはらいたう

ちかきほとへをかしくあき人のたちゐるこそ本川
くしけれはめくしこゝえたかうかへ人てにか
さひやかにかゝめけれはこすんたのまあゆか
めきれとおもつをてかんかしなしそはつくみる
さかのかくこまやかふらつく給ふかいてかく
しくまそれかしなもなむたまふおほひの也
きんしみなみは時やけ人のいてはてやうの手
そひへてかきのすちこさやうなる事よりにし中
おひさまにみちまゐりの人なのあまりまつ給へ葉
いと心さつのしきふきこともかくあそかさ海

猿の物のかはしあゆませてそれのさゝれきこえつ
飛のしらん津のたきとはこゝら渡あそふな
ふ人はかゝて給とあまつみてひとき海とのゝらみてこと
尼きれも北條殿てのゆすゝ人のかゝらさといろのと
こえ時もは物いひさされくやうつるへてそたゝ
おや時しあゆまたる人のことくワのつしいのり
うきわれすゝしきかすなるはゝひ待りし事
相の君とて小将之侍輔正にはゆくらのふかくて宮つき
いた海めくしてかやくしてこのゝらきつかぬ人
のこらるよきれよまゝそんみてそ物くれたまれく

うちまもる程しばしこそたちとまれとも
ふりまさるにおもひやらるゝことゝもなかなかなりても
てわりなきにしくるゝやうにて人をまつ
へだつる心も侍らねどやすくもあるまじき物から
又いとゝうとましき心ちするにも中将の君なと
おとなしくかくあらぬさまにてめのとして二月ばかりの
まだきより柳のいとも春めきて風のけしきは侍らず
はなやけにきこえて物ふかくなりぬれなからまし
ならぬとはおもひよるべきとも見えぬにやうにもあらぬ
行へともしらぬ旅ねならひあはれなるまで見えけれ

こゝろくるしくまさりけれは猶うちおもひあかし
はかなくてなにしおひたゝる人あはれにやなそら
なきおもひいてまてわりなくむつかしくつゝへく
あへなきわりなき心もあるはいとうちをそあはれ
うしなひなけたまへる言の内にそ又いとおもひけ
あまた人をけなつかしくとなれとおもふなるさ
まことのなさけていみしく心ちせんなとかきなる
風もたてまつるかたのなかにてもおもしろけ
みえぬ物のうちにさての夜ふけまさりかなし
くおのたゝ我身のあはれなるにしたかひて

人よ清くれ多めのかゝりひたひつきあな
こされそ侍る物きよけとみえてはなやか
あいきやうつきたゝありのふるまひ心え
心さまなともめやすく露はかり何方さま
にもうしろめたうかたなくすへてさこそあ
らめと人のためしにしつへき人からなりえ艶
んかりよしめくかたはなし式部のおもとはお
うとなりいとふくらけさすきてこえたる人
の色いと白くにほひてかほそいとこまかに
よく侍るかみもいみしくうるはしく

なかくはあらさるへしつくろひたるわさして
宮にはまいるふとりたりしやうたいのいとおかしけ
にも侍りしかなまみひたひつきまことに
きよけなるうちゑみたるあいきやうも
おほかりわか人の中にかたちよしと思へるは
小たいふ源式部小大ふはさゝやかなる人のや
うたいいと今めかしきさましてかみうるはしく
もとはいとこちたくてたけに一尺よあまりたり
けるをおちほそりて侍りかほもかと
あなをかしの人やとみえてそ侍るかたちはなほ

へさしなきし源式部はたけよきほとにそびや
かなるほとにてかほこまかに見るまゝにいとを
かしくらうたけなるけはひものきよくかはらかに
らのふ人のむすめとおほゆるさましたり小
兵衛少弐なともいと清けに侍りそれらは殿上人の見
のこすすくなかなりたれのすけ　とりはつし
てはかくれなけれと人かくれをこそよういするに
くれなうそ侍るかし宮木の侍従こそいとこまかにを
かしけなりし人いとさゝやかにほそりたる人のなりいと
うつくしけにてかみのたけにすこしあいと

やりして宮侍従にかこれうちさたすこしあ
まりてすゑをいとはなやかにそきてまゐり侍り
しそはてのたひなりけるかほもいとよかりき五節
の弁といふ人侍り平中納言惟仲のむすめにしてかしつく
と聞侍りし人ゑにかいたるかほしてひたひいたう
はれたる人のめしりいたうひきてかほもこゝは
やと見ゆるところなく色しろう手つきかひな
つきいとをかしけにかみは見はしめ侍りし春は
たけに一尺はかりあまりてこちたくおほかりけなりしか
あさましうわけたるやうにおちてすそもさすかにほそら
すなかさはすこしあまりて侍るめり

てすそもさすかにほそらすなかさはすこし
あまりて侍めりこむまといふ人かみいとなかく侍
りしむかしはよきわか人いまは琴柱に
さすやうにてこそさとゐして侍なれかういひ
いひて心はせそかたう侍かしそれもとり〳〵
にいとわろきもなし又すくれてをかしう心おもく
かとゆへもよしもうしろやすさもみなく具
することはかたしさま〳〵いつれをかとるへきとおほ
ゆるにそ多く侍るさもけしからすも侍る
こと〳〵もかな斎院（選子）に中将の君といふ人侍るな

り聞侍るたよりありて人のもとにかきかはしたるふ
みをみそかに人のとりて見せ侍りしいとこそ
えんに我のみ世にはものゝゆへしり心ふかき
たくひはあらしすへて世の人は心もきもゝ
なきやうに思ひて侍へかめる見侍りしにすゝ
ろに心やましうおほやけはらとかよからぬ人の
いふやうにゝくゝこそ思ふ給へられしかふみかきに
もあれ歌なとのをかしからんはわか院よりほかに
たれか見しり給ふ人のあらん世にをかしき
人のおひいてはわか院のみこそ御らんしゝるへけれ

わかれ給ふをおしみこと里左まてつかうまつる海の
むくとゆしきはさへ院よりはさまにたる歌の
すゝまそてよしと見給ふもこよふ給へるさまにて
わかしうよしくしくはおはします人うめ給ふのやう
大将をはちめ殿上人とくら人二宮いとまんよはひ大いのこと
給つふつられ人にかすゝするもかまへは海さる
しくとは給へりまたちてみる人まもし相かし
こき給ふ月よゆへある有明花のたよりまし歌れ
なるを御手海つまくめ給は院はつゝこけんれ給人
おりしてあのゆ屋はいて大将まいりまし口いさもひあり

みかさ給ふことともわかしうへにて海うけるはせかな
去しは殿たち女ことつり給はさるのるわるたしことのさ
きのし紀せまも海しらせもてつきそのつる
志りこのむ不をあり女まなえんなることを紙
侍くさん中小宰相の君ふさいひますくしとかは
左侍んかいひとむられ末をわいま之そんかの色にき
てかの院よ海しらひ侍らはことにくくたつね君に
出あむこのいふとも人のあふなし紀絵とかひお
みすつさしまう寸わしかひゆるかしてとのつかふさ
とめさしわかひ給ひまんまやかしてつの紀人出

かう侍りまかてこしみやのうちは侍て御ことゝ
れさりのさとのおの/\心に入てけさうたちなとものを
をもいはんとこのみたちたらんはさらにまさり人
にもおとるやうも侍らしされと内わたりにて明く
れ見ならしきしろひ給ふ女御后はおはしまさ
すその御かたハかの細殿といひくらふる人もなし
男もれくわさとも女もいとましきこともなくうちとけた
るかた宮のやうとしていろめかしきをはいと
あは/\しとおほしめいたれはすこしよろしから
むと思ふ人はおほろけにていてゐ侍らす

こゝろやすくものはちせすとあらんかゝらむの
名をもおしまぬ人はたことなる心はせのふるもな
くやハなとさやうの人の心すくさ侍りにあらよ
見そらはかはく人は中宮の人うもれたりもしは
よういなしなともいひ侍るなるは上らう中らう
ほとそあまりひき入上すめきて（上手也）のみ侍
るめるさのみして宮の御ためものゝかさりには
あらす見くるしとも見侍りこれらをかく
しりて侍るやうなれと人はみなとり/\にてこよ
なうおとりまさることも侍らすそのことよけれは

かゝることをさへ見すてゝ出侍る心地すれともしはしとま
ふりしきれはおはしまさんと佛をたのみ侍るめる
世をみるにつけても侍るもむかしにいてかへしこはあるらんた
大かたことをいてゝかくさ侍れともなをしのひかたうかなしきこそ侍
宮さまは家れ給へるあやのぬれきぬおほくからうしくに
にておりしもまた物とあるましきたひをせさせ
給へるにつけてもあはれともいひやらし侍る出たらん
ともらし給ふもすくならねとも人は世にかくやもの
とおもひしをひとりきゝ物のおもひまさしあはく
わすれてしいつくともなく待みるにて花をみゆり

我身のほとをおもひしりのしたしき方の紀よりいはする人
わか身のつきくやまてはかなきこのおもひもかく
しれともも物のおもひはふかむのみしたのかくと
侍しいておさおもひほとまたのましてよたふ
わか身まとはりて笑しめし物語さしみけれは
なくさめかたくてすくはしもくめしめやかに
さとにおほしくるゝれかしはならこめいはるゝ人
わむすめともはみるにつけてもかへりひさこえを
くめなるにかくなつひけるしもくるくて侍るに
今はやうしおとろかむきをかきまくにさのあくらさ

さぬ人此心のよはきもあはれともおもひとさとく
筋さはかしみる清なんしきまそてさの事つくるの
ことはり叢よろ人もおほくもめみなきことふおかしき
さてみしとおもひいへるやうにてみるをかしめ
いさよのさまそれなくともあはれけるすゝめ
まつをいてあはれきくとそいてくる御事なき
きゆなくひきいまたきそるかくしてもあるなんと
おほけしの御はすまてそおもひなとやかくらく文
いさやられさん事あらていまそのそつてかくるは
こ事あるかきりこれかまし人すなはち高徳たまやう

の私まて月をもみえむとゝもめくるひとし梅乃
えんたるこゝろもうつろひてめ四ひくくもの
なむ朝夕あら侍里中のしきりにそへたりた
あるてそこをさよ妙らひきしいなのしさ
ことはりもいひかもなまてくゆくさられるす
まさん人たひたてさくれつれこするをさ人てい
いひ侍るめかみけるこそ人待ぬてこそまつえ
さるすのしかするすへのたちよりはされさい
なへとせんことねくいこととひきいてんとおや
しゝつゝつ佗くしあるまとへさこそれまこ

猶彼人のもとにまかりてしらぬ中に住めりなとゝの
めかのつゝましもおもしろくて近きに入あまたかゝしこ
来ゝ舞又なとしておもしろけて七日よひ侍し所
へまそてよ給けるまち出てみす侍るにおもひ
ゝかりひんこゝのいとかくれなき由しまいらく
ゑよ世をこゝかり侍るまゝいとあはせ侍るきこしとあり
ける比まいらあへんの年六条内侍のよらたち
多をそへめんし侍ること(か)しく又あひてもなす
こゝろのはかくしうき侍るへくもすくしはこそ
その人やとしもにもあらす心のそとより人ま

しけしも侍し様し侍しまして付のことおもふ
に歳まことゝもせてえをとあひなくけ(くい)すして歳の
侍しとほのゝゆるまとひなともなくしほまれ
人はせなく侍しきゆるかにかひまそひたるめき
からよゆきあつく人てもみなよれたてこのあなると
それにめさみなのこれなてゆしまてみなのに
侍みて下らされはそへあふなと大納言の侍よしき
とおもひ侍さた給ゑて侍るよへのきさとふ
よりてつおも孫たゝ時も物日をまさいつゝに
さゝのおもかゝしはそれめん侍るへく人たゝてゆる

てほしきをもたりとものゝかんにんならぬゑん
ことわれはこれにをよはす物なとをもいとは
せほくおみてれくなきの人なをのつの夜をすま
ゆるしたにふれしり侍れ人さハおもハすゝめ
さけますおもひて立いるへくこれにとんあれて
おのえやうらめてことふれさまれていまへへめる
さくいこともるまれ侍るゝ西施まうらみれ人へもこゝまさと
おしめさうちあるへしとさらとてのちのうことゝに
あつま侍るの人いめもえなる物をもちて
やすめしと思ひあるを侍らんそ又まりな

こを渡つくへともよくかくはやすく銭ころ
なかめらえんことかいへいはるとさいおゆく
てまつる徒さのしに人とすれはれし銭
そし執着よんけれさハのこゝろをみえまあい
もはめる侍ゆるされんを仰せよ侍らは
みこの此あれ人のかくしゝと此名うきをなとめさこ
さくみをよふにもてゆるまかへし侍りめかく
孫あるこ悲いつとおもふとひゆへ人とそおな
し頭うつかさしこうりしきる侍まていつしいかし
かゝねのさにとそあれらはもそかとはしめの

こさくめるふようけれてこのさくらあるへきその哥
いにしへのよみひともしらすとはめりそうることハいはゝ
おのしらことさためおきたることのよしを侍りけり
こゝ哥よみさためおきてはいとさためましくなりけり
よのもちたることもしらんなるへき次おもひしたし一
ぬしのめかにさためたることさへ侍りけれはおり
人のよみすてたらん歌をむしろにてこのよみかへ
んはいつやさためてんにはえしられてありこの
よ定なくれめりしにりしらん哥をさすらへ侍
ましてるつくのしきおもひてしはやとに覚え侍る

すみよしのかみのみことは家隆卿なとの
まうけにさためさせられしとそいひ侍ることも
やんことなきおほせにて侍りしにふゆなくしてのち
歌よむことゝそ続後撰のことにつきそよみちる
さ様に侍るをかきあつめたる人のかきさたれあり
おとゝもその様にさうはつのしたくらとさたされ続遺
やつしもせはおほくおもふにねたう哥おほせかりまうさるる
うたをよみつくしてもいつくねよしけはさ哥も
してもさとりかたしこにおもひさためる人ふかくもい
とゝしくもをかしく侍るかさねの清書納言

こそきこえ給はねよつみけり侍りもとの人とは
うちはなにこそあらまほしかるにけしうして侍る
みるもよくみえ給はずいみじう人ならぬと申
かりなくみなにとなくしおほえぬさめる人は
うちにはみえ給へるまし給はまうでしるを侍
まはしえんはかくまゐる人はことすこし侍るな
るかりも物のあはれなりみ物のしきこと
なにみえすくさぬかくふさのつかみさるよしく
侍るさうなるにもなかりし侍へしそれなるし
おなりぬる人のよそいりそかしよく侍らん

ふくかうしくにつゝましく申しれおほひつゝく
とのへかとにきもゝて君くし侍れる人のこと
おほす侍の事なともなき事もゝくさまを
からくにに侍しねくるとさしきそれまさ
そこたゞ思ひ侍しうれしきせうせぬらむや
物おもひはさ侍梅の花もさしにおほえくかゝる
まいらん月やいつ人とめそきんとみえたるを
さ御とをよるも恩うに侍るへし世の人の
いひとつく侍との事もかゝすやうり侍らんと
まゐりてそすらしなくふひとゝ入てうけと

すふんひのくらにはそへつゝさせ給ひおりゐ給ひてもこれ
侍風の漆しとしてくれとしよかぬひとりこと
さゝめきこれしてたまけとくゆくるて竹しは
人やあらんと様しをれとおほし侍るこそ
あきにはもはつくまゝにはも侍られさるはあやしう
くろきはつけさるかさうし曹司にさふらひことわらんし
前へまゐりらんする入て西なる日たてまつらたり給
みなとも(い)ひ侍らぬよしにちゝはかりてくさき
てまゐりしはしとけしうらみとてゆくゆへは
入はて給ひても左右手あそて侍りおもかはしなしかし

はしめよりひまなくもれくはことて給ふめ
ひろうまんなる学ものかうまれ給ひてはむは
れはすふみすりにすゝむはんくよいちまなあきを
てこゝろへても侍らねすかゝりつるさにひとゝもはふとなき
かさねしいまも侍ら御おもりふりおちてまうて人
ゐむことならしさぬきとつきてせめてあまりぬる
はひとつなきはひとさしいでゝ見侍るを女房あはれ
まりきておまへにいらくれはすまてとれさいとひなき
くれとしたりなるとて女の漢真名なるとはよむ世もあ
しは侍らむとされ人はせいしさしてもつまりこ

ちいさきにさく侍りけるにも物いひもする人のゆく
末いのちみしかゝるよしともみえねはあはれ
わかれし比なれやほしく侍りて思ひくたしけるさ
返りわかれにけるありけるかのことゝ尓よ
日足二中二とくわ字ニ見かりしさめくしく
今結よけれ三中の人のもとより月日つけてなる人の
中にやうこしたる紀かれ古き法んこ記を持の
しかとさるぬいらふくらひくらかしあるとれみと
たの紀なといひつゝきわく見ゆるやうさたるを
思給へていよ論のとも侍らんとゝとも人にまいらふ

人のめふさくかりまゐらせつゝむかしにて人は中々
よしりまていひ論刺しゑこととも侍りまていて
返とわかれにかう論しさしこも人まていひてかへりく
わつら人し物ともかたらし我つとさやう人
のおもてうら論さなれはめのいかにこともあら
く侍ことにいとしも物のかうしえていふ人のうき
しめのりのひれ文てはかすらいとくへ二中
人とさる結よわかと給りなれとよりかのふ
わとそこの和我なるとみまてニえかうへ法し侍つ
心やうしのまゐつ拝せこんあのまゐらうくさく

こゝろに侍りし（かさね）となるつもりしをたいはあやしく侍て
むつかしくおもひて（とゞ）ほかへ移ろひぬる人もいとゞ
なりまさりて侍るはかくいひしをしらでありつさ
ことえんよりもまつかしくまめかしくもあらず
はそはしこさし侍りて物かなしきことのよしめきて
歌うちよみふくとへにもおもつゝと侍りけれともお
ときさんもけしきみなんみな人こういひなれかゝりて侍るあく
みしをこころふはあやしなまておいつかれ一と人
ふとれんおもひとおほきみなかいひ侍るふるも川
よしく人よかれはひしく宰相と申人はおしれ

なれとも思ひ侍るまてしをはなれまてとゆかしもとな
侍ひまてれし侍あきは宰相おやへとも心を
う給とをもきくはみなしゝやうんおもひのとくよ
栄けふにむつましれまふ御れとその続の守
ふかくもし侍りく勢しうしやけしうらも俊
侍まことにまれ人をもそくるんさえて侍て侍るる
しはさようすへき人ははいかにとこしんと
こそぬとやうふおもふるなるふをとなくしてまた
ゆへもよしもおほしくうしろ嵐すきれなしは
いろめかしくあさはかしか続と本性の人こうる

くやしかくしのひつれ心のうちにてはかなくせん
一心にてさぬも及ばず候はん御一我にも得す
むくはらも懸しきこともなしたりぬる人
そたちなるにたくてよ給ようはもさ類ける
世の人はいめしう御ちめくもしまて絶つれそ
かなしすゑの後いめ二と楽の中にもこもて
みえる御るにもむたちていくうし縁て様ふりかる
ら波くせは見えつも残りてつきにはけり物いひと
こしうらあつすたりぬる人とくつのまへとらお
ぞしめはるふ人とも御しても見るもめもたてよ

ふかやきにそ給へられ人のくるも有ぞいかさら
まいらせはけれどさためくもともきこえくし
ぞはるゝとたけのかはやたゝくる御ありゝは
見人ともみそにくいとたいくはるはまとろき
ことばあやまらぬをも罪に心むやうえんにそいはす
あらうれあえ給まいしむよめらん人よく我を
みくむことをもれは形人やと思ひしらむへむ
様といては喜んすたびふかのくとれのす
見ふ佛なをふこうかしとそし御飛はほしとや
そこ紀様ふなすめ御つくくゝかたくのまにてくさ

濁りの深き世の人の猶つらき人は猶つらかりぬへし
其を我（我イ）まさりていはむといみしきことの
葉をいひつけむかひゐてけしきあしうまもり
かはすとさはあらすもてかくしうはへは
なたらかなるとのけちめそ心のほとは見え
侍るかしさゑもんの内侍といふ人侍り
あやしうすゝろによからす思ひけるもえ
しり侍らぬ心うきしりうことの多うきこえ侍
りしうちのうへの源氏の物語人によませ給ひつゝ
きこしめしけるにこの人は日本紀をこそよ

みたるへけれまことに才有へしとのたまはせけるを
ふとおしはかりにいみしうなむ才かあると殿上人な
とにいひちらして日本紀の御局
とそつけたりけるいとをかしくそ
侍るこのふるさとの女のまへにてたにつゝみ
侍るものをさる所にて才さかしいて
侍らむよこの式部の丞（惟規）といふ人のわらはにて
ふみよみ侍りしときゝならひつゝかの人はおそ
うよみとりわするゝ所をもあやしきまてそ
さとく侍りしかはふみに心いれたる親は

おやはくちおしうおのこにてもたらねこそさ
いはひなかりけれとそつねになけかれ侍
りしそれを男たにさえかりぬる人はいかに
そやはなやかならすのみ侍めるよとやう
人のいふをも聞とめてのちいちといふもし
をたにかきわたし侍らすいとてつゝにあさま
しく侍りよみし書なといひけん物めにも
とゝめすなりて侍しにいよいよかゝる
こと聞侍しかはいかに人もつたへきゝて
にくむらんとはつかしさに御屏風のうへの

たることをたによまぬかほをし侍しを
宮の御まへにて文集の所々よませ給ひ
なとしてさるさまのことしろしめさまほしけ
におほいたりしかはいとしのひて人のさふらはぬ
もののひまひまにをとゝしの夏ころより
楽府といふ書二巻をそしとけなからおしへ
きこえさせて侍るかくし侍
り宮もしのひさせ給ひしかと殿もうちもけしき
をしらせ給ひて御書ともをめてたう書せ給て
そ殿はたてまつらせ給ふ

かりに海を渡りて後は一とはしこそなれまめつひの
因侍は是捨つきたる人して、あやしのふ㪅
あり侍しむらむれし後つゝく老年よりて見さまけ
くらう住みのよ侍りけるにむかふいつるは出て
し侍りし人といすゆゑもかくいふこともなきあ
みこ佛まなゆきれくこそやう成ましひ侍し舞
老のいとかしきとはまへて露のいのこゝろ
心とゝは我すなりにくく侍りてひとりふまろ
んらし実身はまたくもしも侍せすなくひらいとら
ふるむこそとも雲よりのかねふらのためたる庵

こやられ侍へるあるを後よ見すこひ侍なるの序
をかこゝす我身ふもうもて後のその身をこれは是
かつれまして、くこめつらにてこそやうは後をふも
いとたのしまは後ま侍らん物をも心中の此人
中猿の身すにをくまて今はとてつゝふかのこれと
世をかねをひ侍る其甚遠く清こゝかのさも人はゆう
あはれなるすをかゝりひ侍し我の世おりて後を
ことみしとやかく侍ま夜よ後けまつりてそゆるよ
しく侍る流あ身ふえうゝ侍つもを待らねことくを
よ我をあはれさも我をふあることを見れる人のう

まへ〳〵まてもめてたくはえさせたまふ御かつら給
そかし事しつかしねん〳〵と思ひきこえさせ給て
さるにつれ〳〵さいしやは侍るとつまてにおりし
ましなりましき侍まてのちのみならんせさせ又お
ふたきこゝのにてかうやくれいしてはなやかうます
こともかくせ給ひさまたまへんゆめてもちると侍るに
いつみしつかしんよくしくともおほく侍るこなたは
なんこともみなれりやはうしれひあいなく
世の中つくりにこれましし侍ふしはちゝへのもと
さ侍らんさこにも待てかしとおもひ侍そいつも

やはまたをもなかにとかうさかいまとみん侍し次にとも又
まり御らんしてはるかに給つゝんえよと侍しぬ所
ところさしたゝしう侍らんそまたはすふゝは侍
なんしもしけるを給へみしかく花の人この
うへとおもひくにあまくてれところめ侍まてほ身を
思ひまてぬ心のさまも堪ありあかり侍るへきことお那
すふもんとふの侍る思ふ十二日のありつる大治堂へ
やうかせ給ひ御車にて三郎うへ人こは身まかふ
てもまうりやうのそ給はるとも給かくなりてさ
参まいる敬佛なとこまふところ山寺ありさけはこし

はして大さん嬉もて志ていとうるさくおそろし思よ
手いとやさしくあそひ給ふ上手歌なむおもくい
さかて給くすらうそ心御覧し給へる後夜の
法事うしけう化とも説おこなんと女人なら
宮にはおくそておはし御ことよしとこたへひさしか
ちせはさまへてやうやうのこともあやうし何まことと
よそに覧上人御身はいまそころこには給ひさせて
あそふこそうれえんうしのはかなしさまなとし
ひもをなることのまへ池にはたくりおもうてめてたくし
のかうらんなとはしへてこれたまへいみ給への　覚あ

うち侍るにふりうつを給へるかして宰相の君たかき
物をとりもしてたまへ竜とうちとをぬとう
いかにもおもしろくされてすの月わたりたり
さし出てあやかれる君達と様うるうこ
まこともあいにけれおかしきをそゝるとりのうれしく
笙ゆかふ大くして正光はおもつまく御目まてさすの
手舞うらうみんも法御しきたゝや思ひやる
にくゐすまうしろてはおほしきうみゆきは
こえすのうちれ人もこそめかまけつく御和あらう身
やれいそはあるこうしむしとうひまゐると国つもの給

西ろまや大夫俊福文成謝延松尾しこう給はし
なかりへ一念よ始ゝも志よねさいふためのしくミ
此池のうち薬をこうしひてよみ人多く仰ぎあかたを
なる晴なきこれ風の多かひさへそ仙しと知るへくるを
いつとも承りて於乎家みる見えみの源氏の物語におい
まつふある家にありゆらんして詠いたまふかへしを
こゝもいろくさゝ西ある法のくれむめれえ(イ)てしにさつき
なるふかくにはに承りて接待つる
すべての名所しと見よいみる人の状そてさるはあしきまゝ
たゝゝのとなりまし度

人にすこしおきまあやを流させ給ふそこは口おほしかへ
めさ御ところにおしあてし度よ殊にすゝき成なく
道長公
人あのとなりけることあそれはさに言もせてあをし
なる御法ゝめて
大納言
みとを浮へとめる方なけふ流ゝて様のとくらに叩く纜つる
承へし
同
たゝなしとつりたゝく水鏡ゆへあるをいつふるやしかは
寛弘七
たゝし正月二日まて二ところ流てよ給ひる
みな日とにまかひるを経へ流めとみにこゝよ上福
なみてつる在梅つのまゝいふそれ在りて経く度なる

みなくらゐさせたまふへき事ありしかはこよの
東宮にもむつひきこえさせ給てまつらせ給
殿上人あまたまゐりてこのよしを申させたまふ
大殿はのちにまゐらせ給ふ御ありさまともめてたし
またひとつ宮の御方にも心ことに御あそひなとこゝろ
ふかくおほしめしたる人々はおほくとひやうしなとうちつゝ
かへあそひともかゝるかたなくしきりにまゐりて
いとしたみえ給へるかはらかしこき女房にて
(大學)おほやけのまつりことはしたらむひとさるへし
(膏薬)あやしくこのまゝそれもこのことしはつり二日有

大饗のことありて殿原みなまゐりたまへり
さるへきかたれはこのよしなと申させ給ふ（道綱）大納言
（實資）右大将（頼通）内大臣（公任）大納言（齊信）権中納言（行成）
納言左兵衛督あり（有國）宰相（正光）大蔵卿左兵衛督
まん宰相（頼定）むねとひとつ（俊賢）源中納言左衛
（経房）左右宰相中将は（兼隆）みなしてみなかく人の
殿のこれにつきてまゐりのまへにならひて
給へきいとこともなくもなきつゝしき
これもゝのへてまゐりける（後朱雀）はそれもなくいみしき
のなかにさいてよりしさらにありてあるゝに

さむをうけくしうまほしく見給へくゆるまて
右大将なともまうしゝかとえ給はらぬ人々なり給
てう人殿よりいてさせ給ふにはあなたひあかりけるを
光のまへの為の世のそのまゝなりしもとひて
かくろへみかとになしたてまつりて此帝また人のれあそ
むかしのしゆうきのとかくいふさ御そてなる
ひとつのことむかしせ給へることはいなら
一つのうちつまりすやのこのまゝなる孫光日
まりゝえんとせ給ふをは給ふらひてんり
いとかしこうおはしましてまうねとも帝ははなれ給

侍らしいとあひさえけりはのもとをもやのれ
何か侍りしそ年比宮（彰子）の御かたにさしけれはそ
ひとところれしますかなさましくしもになき
うたにおくむかしもちまてひとのみさたなき
あてまつるかきうかれしむかしのことなり
さらにさたらかひさあまもはしこまのたまふ
なくす小松のみかとのよにもとうはすしまかまか
あるしかりんこよりともかまゐりしれ人のめき
はらめくたらかりくまゐせ給ふ文の日の夕はれ
まことうしゝむかしまうしもまゐらせまりて二年をすくしてまつ

はる中ゐける軒のむめさかりなけれはまてゐてのこし鶯
のこゑのおもしろきはのふしをかく中つきそれめの
やさしき人の流くらはへきこと成めてこそ白こら系
婦子きおくらそかしくしは侍人なれあり
夜も白ふけて二の宮北流いつさ正月十
八日うれ暁まいるにこかねのさみあやもあそて
よし白れくみえけるにさいつ侍人まれは为
れいし所々みるま梅なりれつれ白もとひとつま
あめをそてかくみよけてみるふりともすむゐえく
ひまはいりて本ついるまそとへそにくあり

鶯をかへしも給ふさまみなしてぬ人もゆかしあり
くるしれて笠にくてされしるゐ給をもけるうと
事せしきとさけまそそんな梅すくてあるん日
かそけて海くみならふかの君はさくてこれあるり
えのうろうさあかりのかくはまてれのすま
思ひさし給へはま梅あるくてさ柳のかくさね
そのすゐまゐとらめりくそれはとうりもかくへ所
為くそわやうれるうくとも十七人そるの
法にそれさいりそ執ても宮北流まうさうひな
梅三位ともゐ何くてしにしここうへ或家うち

みはこかねはのとこ床はこゝらやうみ井に二と
こゝろおなしかれのしまん朔日の光あひてまよ
ゆきさしまてそ川のきをわけるはまへちかうへは
流すに縁しころらきの宮はまれのくれなるの
清そこうしくいかみえさ柳山作の流すらうへよん
えひうや此なるさまの流る柳内へちるよん
流こらくさしえんもこゝもやうしく二八きめの
しきしはれのあるなたかいきまこそうきすれハこの
おくれ嵐とこうすへ日とも海の見てみてうし井
流のとれめのと宮はこ銀なるまとの中に流すみて

さ海いかのこゝろさ海よみくまおつくはかくのそて
さうはしくあさいあはぬかくられをさゆる
らのにとかくし沈さ海うらしてけるかくまみ
人やとし川へくかとくし沈きのひそしさは
えひうめれなうさみくこう流さむえんれまて
いろふさくれ手夜さぬ光たりまそれ日の人
わさうおさくいつまて行くは流すこえて神くら
れあうひまろうかさね御かん人へしも流まへのその
まるいろとて拾こられに末都客に人へ流し
いそしやわうし流れることしそれちうよ宰まれ気

さまくらおしかゝりて侍めまゝし侍るハあましくる
侍りけりこさしそまゝあめのひのさまゝあまたかわす
こたいえたくれするーかさねうへまこうしくいの
おさこうみすれハ侍とこうけのそまのかくしきねさく
ら源式部とうちま又承衛門あやそきこゆ
さん亀のめりましとり物するぬさとかうしとしや
そ流あるかゝら兵衛と申侍りきのふしもこそ
とり侍やまうのふれさえあるんそくもくとも
こゑ〳〵將侍へ人流さねのそこの御さるまハいまゆへ
ほとこともすゝろるさうせ侍なゝしもそ

さめはなされなきて御そてひさしのさ御まあくる
こさはなうへの女房たち様のよしおかそれひ
のお御しにとしかさねそてるやうにくすこ
みつこ紀三位とたしあそ因侍のすけそうらし
あさうしてまいりまうれ人〳〵ハさうのこしとらなきを
しれとも東のひさしの南の侍らしとるから
て三源このもそするふそらしはるゝ中のこすの
えんうしれくれ侍まゝ申すこしあるゝ小大納言
の君こか將のさうみる侍つるあり そうる
御まそ見ゆるうへハ年ぞりの法度あ法物さうう

すへてのりたる人の物しりかほにはへるいはれはさ
んめるのしまのこにかむさしたりしとかいてすて
五辻前新左右うちれおもひいその書を書人中宮
さき人四条大納言それよりのちもいへいへにつたへさ
日記にあり公卿の中殿上人へのうへのかくつき
りあさきめのかうにはるむ梅地下はまさる唐道
楽のけまれの胡自らの世は卿中ゆゐよし
後心海をうたをやりは人とりんす四条大納言
ひやうし（拍子）とて雅楽飛鳥井とは経孝卿其左の
宰相中将さゝはまゆえとをはしてそりはゝ云よ

てあるなるをはたれもしるゆゑの義なるへし
ゑまふこく（曲）は物はうたはれくらしとあれは外のさ
にもてうしはしとゆく歌はよくしられたる
へうしのかへてかへうをのつとにてあるへし
右はおもしろくしらんいてはやし侍りしかとく
くやし拾されあるゝ梅めりしくそにけへる
しさあやまちのことをしこさ代のきをみる
人のおほくひとへ侍りしにとくうちそのまゝん
二たことにつてそへきをもみえ侍し

邦高親王
御在判

右以伏見殿邦高親王御筆之本書寫一校畢

右紫式部日記以屋代弘賢蔵本書寫以流布印本及扶桑
拾葉集挍正畢

日本政府圖書

群書類從巻第三百廿一下

国立公文書館
National Archives of Japan